

景清伝承の起源と展開

—口承文芸と記載文芸のはざまから見た—

一、軍記物語に表れた景清と御霊信仰

鎌倉時代の軍記物、室町時代の謡曲、舞の本、それから江戸時代の浄瑠璃、歌舞伎に至るまで、民衆の英雄として、人气的であった人物の一人は、悪七兵衛景清であった。

景清の史実性についての確実な資料は乏しく、『吾妻鏡』などにも、その名は現れない。ただ十二巻本の『平家物語』では、八島合戦のとき、美尾谷十郎との一騎打ちの中で、豪快なシコロ引きの話が語られる位で、そのほかは、大勢の平氏の武者の中に、その名をつらねるだけで、それほどの武将とも思われない。

ただ『源平盛衰記』では、敵軍の前に立って、「今日此頃、童部までも沙汰すなる、上総悪七兵衛景清。我と思はん人は、落合へ落合へ。」と言っているところを見ると、当時かなり豪勇で知られていたことになるが、それにしては、戦場ではめざましい活躍がない。

壇浦合戦のときは、平氏の一族が殆んど全員、海中に身を投じたり、討ち死にしたりした中で、「されどその中に、越中次郎兵衛盛嗣、上総五郎兵衛忠光、悪七兵衛景清、飛駄四郎兵衛は、何としてか運れたりけん、そこを最終に落ちにけり。」と記され、いつのまにか、逃げ出している。こんなありさまで、戦場でのかれの働きは、ひどく消極的

で口ほどにもない。

戦後の顛末としてのかれの既述としては、異本系の「長門本・平家物語」の中に、次の話が見える。その巻十九の「悪七兵衛降人事」の条に、建久六年（一一九五）三月に、源頼朝の上洛と、東大寺大仏供養のあった日（三月十二日）に、平家の侍上総悪七兵衛景清が頼朝へ降人となったので、和田義盛方に、あずけさせた処、少しも降人らしくふるまわず、傲慢な態度ばかり続けるので、和田方ではもてあまし、その申請によって、八田知家方に移されたとあり、更に巻二十一「悪七兵衛景清事」の条では、同七年三月七日に、湯水を断って、死亡したと記される。

これらの軍記物の記事が、どれほどの史実性を持つのかは、今の処、何の確証もないが、当時、そうした平家よりの降人やら落人やらが盛んに鎌倉に召し捕られたことは史実である。『吾妻鏡』巻二の建久三年（一一九二）の条に見える、かれの兄と伝える上総五郎兵衛忠光が、鎌倉に召し捕られ、面縛されたとき、懐中より一尺ほどの小刀が発見され、また魚の鱗で、左眼を覆うという異様な風態であったので、入牢斬首されたとか、またそれより先、『吾妻鏡』元暦二年（一一八五）五月十日に、忠光・景清の父と伝えられる上総介忠清が捕らえられ、同十六日に六条河原に斬首されたことなど、色々と平氏の残党の捕縛

松* 前 健

と処刑が報じられていたときであった。

従って、景清の場合も、そのころ、やはり鎌倉に召し捕られ、幽囚の中で、食を断つて死ぬということも、確かにあり得ることである。恐らく史実に近いものであろう。

それにしても、かれの最期というのも、忠清や忠光と違い、自ら降人となつてゐることなど、それはどの義士だとも思えない。その死は、その剛直さの故というよりは、そのあざかり役の八田家での冷遇に対する私憤の故であつたかも知れない。

ここで、かれの出自について述べて見よう。

かれは、平家の一族と一般には考えられているが、実はそうではない。実はその族は、もと藤原南家流の伊勢に住む伊藤氏に属し、源平時代になつてから、東国の上総に仕官した故に、「上総」を名ののだと、大田亮『姓氏家系大辞典』は述べている。『源平盛衰記』に、「上総守忠清、子息五郎兵衛忠光、七郎兵衛景清」とあるように、上総に任官後は、平家の家人となつたのである。

そのかれが、平家に従軍して敗れ、後に状勢非なるを見て、降人となつたわけであり、あまりほめた話ではなからう。

それにかかわらず、後世、かれの後日譚として巷間に伝わつた話は、この実相に比して、余りにも深刻・激越・悲愴な英雄譚であつた。

かれの鎌倉での獄死は、少なくとも、軍記物が流行してゐた鎌倉時代末葉までは、誰も疑うものがないであらう。

かれの異名の悪七兵衛の「悪」という名の由来については、諸説がある。犬井貞恕によれば、『和漢三才図会』に見える、摂津川辺郡高浜村三空寺の条に、景清の伯父大日坊という僧が住持であつたが、落人となつた景清が、訪れて泊まっていたときに、誤解によつて、この伯父を殺してしまつた。それ故に、悪七兵衛というようになったといふが、そんな不名誉な名を、自ら呼ぶはずはないし、その殺したとい

う時期が、落人となつたより前から名乗るのはおかしい。

柳田國男が、怨死した死霊、つまりいわゆる「御霊」「悪霊」を呼ぶ名であらうと論じたのは、恐らく正しい。保元の乱の悪左府頼長、源頼朝を殺した悪禪師公暁、平治の乱に敗れ、清盛をねらつて果さず、六条河原で斬られた悪源太義平、等々がこれであるといふのである。つまりこの名は、元来本人が怨死してからの世人がつけた名称であつて、これが一般化されると、語り物などの中で、本人自らが生前にこの名を名乗るといふ形となるのである。

そうして見ると、かれが悪七兵衛と呼ばれたのは、当然かれの鎌倉での死以後のことであることは、明白である。

それにしても、その悪霊の代表が、なぜ景清でなければならぬかは問題であらう。当時、潜伏中の平家の殘党が、越中次郎兵衛盛嗣、上総守忠清、上総忠光など、数多く刑死してゐるわけであるから、それが悪霊としてまつられなければならないのであるが、事実は、どういふわけか、景清だけが、その代表のような形で「悪」の字がつけられ、またそれが故に後世までその名がたたえられたのであり、その墓と称するものや持仏と称するものが、各地に残つてゐるのも、史実ではなく、伝承にすぎないが、死後の信仰の流布を物語る。

八島でも壇の浦でも、軍記物の世界では景清はさした戦功があつたとは、画かれていない。美尾谷十郎とのシコロピキでも、単なる剛力を誇示するだけのものに過ぎない。戦いの勝敗には何の關係もない。壇の浦合戦でも、十二巻本、『平家物語』では、「坂東武者は馬上戦は得意であるが、船戦は不得意なはずだから、一人残らず水濱けにしてやる」といふまき、敵の大將九郎義経のことを、「その小冠者、心こそ猛くとも、何程のことかあるべき。片脇に挟んで、海に入りなんものを」と言い放つてゐるが、大言壮語のわりには、突戦には何一つ役に立つ働きをしていない。さつさと逃げ、落ちのびてゐる。

『源平盛衰記』などには、前述の、「今日此頃童部までも沙汰する上総悪七兵衛景清」と名のついているが、柳田國男は、この名乗りを、本人自らが発するはずもなく、むしろ死後になって御霊・悪霊化された称号を、あとで追記したのであろうと考えたが、その通りであろう。このような後世の追記らしき部分を削ると、源平合戦のかれの実像さえ、すこぶる怪しくなるのである。

註

- (1) 犬井貞忠『謡曲拾葉抄』巻十二。
 (2) および (3) 柳田國男「立烏帽子考」(『定本柳田國男集』第十一巻、昭44年)。

二、景清の後日譚とその文芸作品

この景清の後日譚は、死んで悪霊に化したはずのかれが、実は生きのびて、目を自らえぐり、盲目となって、琵琶法師となり、九州の宮崎に下り、生涯をその地で終えたとする伝承であり、次の時代の室町時代の中期ごろおこり、一般に流布したのであるが、それが種々の文芸作品となって、残ったのである。

これは、通常の「日本の英雄説話」の範型に見られる、英雄の後日譚にあるモチーフ、即ち、英雄が最後の死地を脱出して生きながらえ、遠国に落ちのびて、人目を忍んで余生を送るというようなタイプのものではなく、反対に、むしろ生きのびた後に、はるかに壮絶・波乱に満ちた生涯を送り、悲劇的な結末に終るという面で後半生こそ、かれの英雄的性格を発揮するのである。

義経が北海道の蝦夷の地に入り、為朝が沖繩に、秀頼が薩摩に、西郷隆盛がロシアに運れたというようなタイプの話では、生前の方が華

やかな生涯であり、後日譚の方は、なくてもよい、平凡な生涯なのである。

一方、景清の後日譚の場合は、生前での平凡さと比べて、かえって生き生きとした描写に富み、史実にはなかった頼朝暗殺の計画、超人的な怪力による牢破り、靈剣アザ丸をもつての「霧の法」の呪術、それに遊君阿古屋との情事や彼女の裏切り、かれの斬首と清水観音の靈験、最後に、自ら目をえぐって盲目の琵琶勾当となり、平家物語を語り、又一人娘の人丸姫との再会の話など、波瀾に満ちた悲劇の主人公の物語である。これは、異常な例と言える。

この景清に関する文芸作品としては、先ず謡曲の『大仏供養』『景清』、それに現在上演はされないが台本だけが存する『籠景清』がある。

『大仏供養』の筋は、奈良大仏供養のとき、景清(シテ)は頼朝を暗殺しようという宿願をもって、先ず清水に参籠し、それから奈良若草辺に住む母を尋ねる。そこで、白張浄衣に立烏帽子という下級神人の姿になり、供養の場に入りこむが、衣のわきより具足の金具が光って見えるので、役人(ワキ)にとがめられ、人ごみに隠れようとする。役人は悪七兵衛だから捕らえよと侍たちに命じ、捕らえようとすると、靈剣アザ丸を抜き、これをかざすと、霧が立ちこめ、これに隠れて消えてしまうのである。

『景清』の筋は、景清が熱田の遊女と契つてもうけた娘の人丸が、日向の宮崎に流され、日向勾当となつて、盲目の乞食となっている景清(シテ)を訪ねる。景清は、昔にかわる今の姿を恥じ、親子の名乗りをしようとなすが、里人(ワキ)のとりにしで、心とけ、親子は対面し、昔の八島合戦の思い出を語るというのである。

『籠景清』は、捕らえられ、首を討たれたはずの景清が、観音の利生によって、命が助かる靈験譚が骨子となっている。

この三つの謡曲は、当時の民間に語られていた幻の英雄一代記ともいふべき、景清物語の重要な断片を、それぞれ切り離して、謡曲に仕立てたもので、それぞれの曲の骨子は、決してその作者の創作ではなく、当時の民間伝承であった形跡がある。

この景清の能が行われたところに、幸若舞の『かげきよ』が、貴紳・武家などに流行していた。どちらの方が先行していたかは、色々と論議もあるが、それらの作品の先後関係よりも、重要なことは、両作品とも、巷間に流布していた幻の景清一代記に素材を得ている、同源の作品だということである。

舞の本「かげきよ」の筋は、次の通りである。東大寺供養で頼朝が南都に赴いたとき、僧形に扮した悪七兵衛が、これを討とうと山門に入り込んだところを、畠山重忠に見あらされ、追手を遁れ、山伏姿で、般若寺坂に待ち伏せしていると、再び重忠に見願わされ、京の清水坂で、非人(被差別民とされた一群の人々)に交わり、体に漆を塗り、乞食に身をやつして、頼朝を要撃しようと待つ。またまた重忠の看破により、果たさざること、三十七度に及ぶが、岳父尾張熱田の大宮司方に暫くかくまわれる。

頼朝が賞をもって、景清を求める制札を立てさせるが、景清との間に子まである清水の遊女阿古王が、金ほしきで、景清のありかを訴え出、景清に酒で酔わせてから、兵を引き入れる。女の変心を怒った景清は、二児を殺して、遁れる。頼朝は大宮司のもとに兵をさし向け彼を呼び出して幽閉する。一方、夫を訴人した阿古王を憎んで、その女を稻瀬川に沈める。

景清は、男のために、自ら名乗りで、牢につながれる。ある日、近所の悪童連が、彼を嘲罵するので、憤怒して怪力で牢を破るが、またも男の難を恐れて立ち帰る。六条河原で斬首されることになるが、景清は清水観音が身代りとなり助かる。頼朝は、事情を知り、景清を赦

し、四万町の地を授ける。

景清は、復讐の念を断つため、両眼をえぐり、西国下りを乞うと、日向宮崎荘を授けられる。清水に詣でると、両眼が明を得た。

宮崎では、三十七才から八十三才まで行いすまし、往生の素懐を乞ったという。

この舞の本の筋は、説話的には、謡曲の三つの筋を合わせたより、よほど複雑で、尾張熱田との関係も、謡曲に見える熱田の遊女と契ったというよりなあいまいな関係でなく、熱田大宮司の娘というよりな具体性が出ているし、阿古王の裏切りというモチーフも出て来ている。

このストーリーは、後に近松門左衛門が、書き下ろした最初の新浄瑠璃『出世景清』(貞享二年へ一六八六)の中にも、取り上げられている。そこでは、裏切りの女は阿古屋という名になっている。景清の身代りに観音がなることも同じで、頼朝の前で赦され、自ら目をえぐって、日向に下るのも同じである。

近松巢林子が、直接に取り上げたのは、舞の本ではなく、舞の本の影響により成立したとされる古浄瑠璃の『景清』(寛文十年・一六七〇正本)であろうといわれるが、未見である。ここでも、裏切りの名は阿古王である。

それにしても、このような復讐鬼としての景清の話と、超人的な牢破りと観音の靈験譚、目をえぐって盲人となることなどのモチーフの源泉としては、従来多くの考証家の説がある。例えば太田蜀山人「半日閑話」などに論じられるように、『吾妻鏡』の上総忠光が捕らわれたとき、懐剣を隠し、目に魚鱗を置いたという話や、『保曆間記』や『長門本平家物語』などに見える、大仏供養の時、源頼朝暗殺を企てた薩摩中務丞宗助などの話や、『長門本平家物語』巻二十に見える、越中次郎兵衛盛次が情婦に訴人された話、および同書巻二十に見える、主馬盛久が、清水観音の靈験によって、斬罪を免れた話などを、取り

合わせて、景清の話に仕立てたのだとする説などがあり、確かに、そうした可能性もかなり濃いようであるが、然し、これらの景清文芸の下地となった巷間の彼の伝承は、そうした単なる文献操作によって、一切の作成がなされたのではなく、柳田國男が、論じたように、巷間に語られる口碑伝承によって醸成されたものである。

江戸時代の考証家の中には、このような彼自身の周辺にいた人物の史料から典拠を求めるほかに、滝沢馬琴『玄同放言』のように、中国の漢籍に、その典拠を求めようとする説もあった。それは『史記』刺客列伝に見える、高漸離の話である。例の荆軻による始皇暗殺の失敗後、友人の高漸離は、名を貸して人に雇われ、筑（一種の竹の弦楽器）を習い、名手となったのを、始皇がきいて、これを召し、苦心を疑い、その目を失明させ、筑を撃たせ、唄わせようとしたが、高は鉛をその中に仕込み、始皇に向けて投げたが、はずれてしまい、誅されたというのである。

漢籍モデル説は、ほかにもある。井沢長秀の『広益俗説辨』には、中国の『皇明通記』という、大明国の史書に、建文皇帝洪武三十五年、左倉都御史の景清という者、帝を弑さんと図り、常に懐中に剣を隠し持っていたのが、露見して、誅に服したという。

なるほどこれらは景清の話とどこか似ていないものでもない。名も一致している。

『曾我物語』『義経記』などの室町時代の語り物の中には、中国の故事が盛んに引かれていて、これらの原素材を、数多く留得することが、伝承する伶人たちの重要な訓練であったらしいことを考え合わせれば、このような著名な故事を、巧みに採りこむことも考えられることではあるが、その場合には、その故事を、語りの中で、異国の例として、引き合いに出されることが普通である。

高漸離の話などは、会見の前にあらかじめ盲目とされるのであって、

景清のように、会見の後に自ら目をえぐるのとは違う。

『皇明通記』の方は、未見であるが、その筋から見ると、明初のことで、この典籍が日本に入って来た時期が問題であろう。こうした典籍が日本に入って、それが巷間に流布され、語り物などに語られるには、かなり年月を要する、またこの景清という人物は、盲目ではない。これとの結び付きは無理であろう。

註

- (1) 野上豊一郎『謡曲全集』第四巻所収。
- (2) 『新群書類従』第八「舞曲」所収「景清」。また荒木繁・池田広司・山本左右編注『幸吉舞』2、平凡社・東洋文庫 一九八二年。
- (3) 黒木勘蔵『近松門左衛門』昭17年、参照。
- (4) 『玄同放言』（『日本隨筆大成』第三巻）。第二十六。
- (5) 『広益俗説弁』正編巻十二。

三、日向の景清伝承と盲人の語り

柳田國男は、盲景清の伝承は、もと南九州を根城とし、景清を元祖とした琵琶法師らの伝承であったと推定しているが、それは恐らく当たっている。古くから（といっても室町以前には遑れないであろう）景清が目をえぐってまつられたといわれる生目八幡宮（生目神社）、およびかれと娘人丸の墓、およびその遺愛の琵琶、持伝などが伝わっている。私も先年ここを訪ねたことがある。

江戸中期の『日向見聞録』（宝暦九年刊）によれば、景清は命を助けてくれた頼朝の恩を感じ、目をえぐって、怨念を断ち、僧となって日向勾当と号し、その両眼をまつたのが、生目八幡だといひ、また

その雷に、景清が宮崎郡地方百町、南方百町、池内村百町都合三百町を知行したが、かれに従って来た家人に、大野・黒岩・高妻・松半・山野・旧橋・重長・有半などの諸氏がいたという。

また『和漢三才図会』には、宮崎の条に悪七兵衛景清の墓がありとし、水鑑景清大居士、建保二年(一一二四)と記されているという。

この日向宮崎の景清墓の石碑は、『日州名跡案内』によれば、眼疾の者が詣で来て、碑石の細粉が靈験ありとて、これを削り去るので、摩滅して行つたと伝え、また太田蜀山人も、『一話一言』巻一の中で、同様な眼疾の者の碑削りを記し、このウズラは、ことごとく片目であるという民間信仰を記している。

この景清の碑と生目神社の現地伝承の中には、景清が目をおぐつたのは、鎌倉ではなく、この日向の地であり、この目が暫く鏡のようになつても光り輝いていたので、その眼珠をご神体として、まつたのが、生目八幡だという口碑が、数多く語られて居り、この口碑は、日向ばかりでなく、薩摩、大隅、肥後などの九州地域に伝わっていることは、舞の本や古浄瑠璃の筋とは違ふ伝承だけに、注意を惹くものがある。『摂津名所図説大成』巻の十に見える、大阪市堂島玉江橋の生目八幡の縁起でも、あれは怨敵源氏の栄を見るにたえず目をえぐつて巖に投げつけ、これが数十年間光り輝いたが、やがて消えたと伝え、この方が語りの本質としての御霊信仰に近い。

それにしても、こうした日向の流人としてのかれの伝承は、もともと鎌倉で憤死したとされる景清とは、別人であつたらうが、両者が恐らくこの日向の地で、同一人の伝承とされ、「景清は生きていた」という伝承となつたのであろう。これを結びつけた媒介者は恐らく日向の盲僧らであろう。舞曲の「かげきよ」や巢林子の『出世景清』で、この怨念を捨てたため目をえぐつたという筋は、これを人情話とするための文学的潤色であらう。

景清勾当説は、本居内逸の『賤者考』に、「俗間に、景清眼をくり出して日向に流し養ふ。是を日向勾当といふなどは、取るに足らず。その昔、盲者に勾当の名称あらむや。この日向に(盲人の)傾ありなどいふにより付合せしなり」と述べているが、それにしても、「俗間」には、そうした伝承が流布していたのである。

天野信景『塩尻』の中で、「盲者の説に、昔、朝家盲人をあはれみ給ひて、上賀茂封境の中に田疇を置いて、掃する所のなき盲人を扶持し給ひしとなり。また日向国に官稱ありて、衆盲を養ひ給ふ。食に充給ひしと言ふもこれまた悲田療病院の類なるべし」と言っているが、それがどれほど史実を反映しているかどうかは、判らないが、そうした盲者給田の伝承が、古くから九州一帯にあり、盲僧によって語り継がれていたことは、事実である。

室町ごろから、九州には、筑前、筑後、豊前、豊後、日向、薩摩など、盲僧が各地の社寺を根城として、琵琶を弾じ、語り物を唱し、また土公地神の戯いをつとめ、地神経を説諭するを、職としていたことは知られている。

江戸時代になつてから、京都を中心とし、専ら平曲のみを語っていた、いわゆる当道者とは、一線を画し、盲僧の方は、主として、地神経、荒神歌を職とし、そのほか雑芸、雑曲を披露し、当道者からは賤視されたが、古い時代には、そうした両者の別はなく、盲僧が平家を語ることもあつたらしく、また逆に、当道者の側でも、地神経を読むこともあつたらしいことは、室町時代の記録には、しばしば見えている。

こうした両者の歴史的相互関係については、中山太郎、岩橋小弥太、中野幡能、その他数多くの専門家の詳細な考証・研究があるが、ここでは、あまり触れられない。

『平家物語』の作者については、異本も数多いので、特定の一人に

限定することは不可能であるが、数多くの作者論の中で、『徒然草』に見える、御鳥羽院のとき、信濃前可行長入道が、生仏という琵琶法師に語らせるために、平家を作ったという有名な話にもあるように、盲人がこれに関与していたことは、疑いない。

室町中期の瑞溪周鳳の日記『臥雲日件録』（義政の頃）、文明二年（一四六九）正月四日の条に、「入夜聽平家」。薰一曰、悪七兵衛カゲキヨ、平家一代、武家合戦様尺記之。平大納言トキタダ、文官、歌詠等事皆記之。……中略……凡相共評論者三十四人。但除平大納言悪七兵衛也。」とあり、どうやら景清に関するものは、削られたものようである。もしかすると、当時は、かれの後日譚に関する謡曲や舞の本なども盛んに流布されていて、どこまでが史実であるかが、貴紳の間でも、問題になっていたから、これは削られたのではあるまいか。

この記事を二十数年遡る同書文安五年（一四四八）の記事には、景一、清一という一方流の平曲語りの名が見えるが、この名のりは、「景」と「清」という二字にそれぞれ「一」を加えたものだという推定があるし、この兩人が共に、平曲の大成者と言われる明石檢校寛一（一三〇〇〜一三七一）の弟子であることも考え合わせて、景清を平家語りの元祖に、撰する説が、能楽大成期には、一部で行われたことを示すと、田代慶一郎は説くが、確かに可能性が高い。

遠く古代ギリシアにおけるホメロス叙事詩『イリアッド』『オデッセイ』が、盲人の伶人団ホメリダイHomertaiによって口唱されたこと、またかれらの元祖と伝えられるホメロス自身も、盲人であったという伝承、それから中世ヨーロッパの吟唱伶人ミンストレルMinstrel、バードBard、トラバドールTroubadour、ジョングルールJongleur、スカルドScaldなどと、しばしば盲人が多かったこと、それによって、旧ユーゴの英雄。マルコ・クラリエヴィッチ王子の叙事詩を語る盲

人楽師、旧ロシアで、叙事詩「プリナ」を唄う吟唱伶人スコモロキ(Skomorokh)などにも盲人が多かったこと、更に広く、アイヌ、タタール、ジャワなどにも、盲人の語り手が多かったことなど、盲人と叙事詩の弾唱者との結びつきは、世界的である。

もちろん、すべての吟唱伶人や物語の語り手が、盲目であったわけではなく、古代ギリシアなどでも、目あきの伶人アオイドスAoidosとか、ラプソドスRhapsodoiなどのものであるが、盲人は盲目の故に、音感が発達し、且つ記憶力が優れたものが多かったが故に、この技を伝えたものが多かったのである。ホメロス詩の作者と伝えられるホメロス自身が、盲目とされたのも、理由のあることである。

中国でも、盲目の楽人が、古くからいたことは知られている。瞽とか瞽師、瞽史。瞽工などと呼ばれるものが、前漢ごろから知られ、諸書に記されるが、その唄った内容は判らない。伝説的帝王舜の父親瞽叟は、頑迷・不徳な人物で常に舜を憎み、何度も舜を殺そうとしたと伝えられる人物であるが、不思議なことに、『呂氏春秋』によると、かれは五弦の瑟（一種の弦楽器）を改良し、十五弦の瑟を作り、これを「大章」といい、これで上帝をまつたが、舜は更にこれを改良し、二十三弦のそれを作ったと伝える。この瞽叟という名は、「盲目の老人」を意味する名であるが、事実一伝によると、かれは真実の盲人だったともいう。

琵琶を演奏し、叙事詩的なものを唄う弾詞は、唐代から行われるようであるが、中山太郎は、明朝の洪武年間に、陶宗儀編纂の『説郛』所収の『洗硯新録』に、次の記事があるのを、注目している。

世之瞽者或男或女、有学弹琵琶、演説古今小説、以覓衣食、北方最多、京師特盛。南京杭州亦有之。

こうした風が、どの位遡れるかは、不明であるが、江戸中期の村瀬椿亭の『秋苑日涉』によると、前述の中国の男女の瞽者の琵琶物語は、

これを陶真と呼び、宋代に日本に入ったものが、琵琶法師の語りとなったという⁽⁵⁾。それについての正確な史料は見つからない。

註

- (1) 柳田「立烏帽子考」(定本第八巻)。同「二つ目五郎考」(定本第五巻)。
- (2) 「日向見聞録」。また荒木博之編『日本伝説大系』(みずうみ書房、昭和58年)、第十四巻74話参照。
- (3) 中山太郎『日本民俗学辞典』所収。
- (4) 『一話一言』(『日本隨筆大成』)
- (5) 本居内遠「賤者考」(『本居内遠全集』)
- (6) 『塩尻』(『日本隨筆大成』)。
- (7) 中山太郎前掲書。岩橋小弥太『日本芸能史』(芸苑社昭和28年)、中野編能願「盲僧」(名著出版平5年)
- (8) 田代慶一郎「景清と蟬丸」(図書刊行会昭和44年)。
- (9) これらについては、C.M. Bowra, *Heroic Poetry*, London, 1961, pp. 420~430を詳し。
- (10) 中山太郎『日本盲人史』(八木書店昭和40年再刊)。参照。

四、盲目の伶人とその文藝

平安中期の藤原明衡『新撰楽記』に見える「琵琶法師の物語」は、内容は不明だが、そのころそうした語りがあったことだけは判る。

『小右記』寛和八年(平安中期)七月十八日の条に、「召_二琵琶法師_一、令_二尽_三才芸_一。給_二少録_一」とあるのも、その徴証である。

蟬丸が、村上天皇のころの、盲目の琵琶法師で、近江の会坂(逢坂)の地で庵を営み、源博雅三位に琵琶の秘曲を授けたのが、盲琵琶のはじまりだという伝承は、『今昔物語』『宇治拾遺物語集』に見える。

この史実性は怪しいが、少なくとも平安後期には、蟬丸を元祖とした琵琶法師の一派があったことは、推察できよう。

この人物を、延喜帝の四の宮だとする謡曲「蟬丸」などの伝承は、後世の妄説で、当時の琵琶法師は、やはり賤業なのであった。

近世はじめの選述かとされる当道座の伝書『当道要集』に見える、雨夜の尊の伝承、すなわち仁明天皇第四皇子人康親王が、失明したため、山城の山科に隠棲し、盲人のために、所領の貢米を分配し、更に盲人らに音曲を教えたので、この親王を当道の元祖として祭ったという伝承は、蟬丸伝承よりはずっと新しく、近世の作物であろう。

一方、九州の地神盲僧は、当道の伝える雨夜尊とは異なった始祖伝承を伝えていた。この中には、常楽院部と玄清部の二派があった。その大筋は、派によって幾分違いが、ほぼ次の通りである。

欽明天皇の御世、殿上人の出自といわれる遊教靈師、もしくは祐教礼子という盲僧がいて、日向の鵜戸の岩窟に住んでいたが、百濟もしくは唐から盲僧が来朝したので、かれから地神経と土荒神の祭りの伝授を受けたという。ここでも、日向国が出て来ている。

日向国は、当道派でも、かつて官田の稲米を支給されたという伝承がある。前述の『当道要集』に、「この官(人康親王)の御家領、大隅・薩摩・日向の内に教ヶ所あり。年々奉る貢米を賢者共に分ち賜ふとかや」と記されている。

一方、盲僧側の『琵琶由来記』にも、例の遊教靈師は、禁廷に召されて大臣坊の称号を賜わり、日向に一寺を営んだが盲人の門葉が殖え、これは日向の佐土原、薩摩阿多郡河辺、肥後の阿智坂郡、その他各地にも広まったと記されている。ここでも日向は、盛んに出て来る。

荒木博之は、この盲僧側の伝承に見える百濟国よりの渡来という伝承を重視し、盲僧らの伝える地神経の源泉を、百濟に求め、古代百濟の地であった韓国全羅南道珍島郡臨津面からの『仏説地神陀羅尼経』

を発見、それとのつながりを指摘したのは、大きな発見であった。⁵¹ 韓国には、パンスーパレスと呼ばれる盲唄がいて、鐘鼓を打ち、読経して、折禱・卜占などを行うので、一名経師、経文師、占師とか呼ばれることは、秋葉隆の研究にもある。⁵²

それにしても、景清が目えぐって琵琶勾当となり、知行を賜わって、日向に下るといふかれの後日譚は、地神盲僧にない「勾当」という名称で呼ばれ、また平家と関連して語られるのは、不思議である。

謡曲『景清』では、落魄して乞食をしているにかかわらず、「日向勾当」と名乗り、舞曲の『かげきよ』では、広大な所領を賜わっている。近松の新浄瑠璃『出世景清』では、浮世の愛憎に苦しみ、義理と人情のはざまに動揺する人間景清を描こうとするが、それでも、結末は、所領を賜わって、日向勾当として、日向に下り、悲劇性を徹底させていない。恐らく、日向現地の伝承にこだわっていたのであろう。

琵琶法師の職階に、検校・別当・座頭などの四階があったのは、当道側だけであって、日向・大隅・薩摩などを根拠とする地神盲僧にはなかったのであるが、そうした盲僧派の職階は、史実記録では、鎌倉以前は一切見られない。当道派の職階とは言っても、別に官で与えられたものではなく、私称にすぎないのであるが、それにしても、検校とか勾当などの名は、すでに室町前期から記録には見える。

例の『当道要集』に見える、彼らの元祖寛一が、明石検校と呼ばれ、足利將軍家の庶流と称し、宮中に入りし、検校以下四官、更に十六階に細分した例を定め、勅許を得たというような伝承は、もちろん後世の作物であるが、室町中期の、『看聞御記』『臥雲日件録』などの記録に、検校・勾当などの肩書きを持つ平家語りの盲法師の権門・貴紳の邸への出入りが盛んに出て来ている。当道側には、こうした呼称がすでにあったことが判る。

『太平記』の有名な塩谷高貞の話の中に、高師直の不例のとき、こ

れを慰めようと、家人たちが酒宴を開き、琵琶法師の寛一検校と真都が、平家語りをしたことが記されている。

もしかすると、景清が勾当と呼ばれて、平家の落人と伝えられる舞曲や謡曲の構想も、このころの産物ではないかとも考えられよう。

近世初めになると、当道、盲僧の二派は、鋭く対立・抗争し合って、互いに勢力と領域を定め、別々な秘儀・秘伝を立てて対立するようになったので、そうした混同はなくなったのであるから、盲僧派の拠点とされた日向に、景清と平家のつながりの伝承ができるはずはない。

室町期には、大和にも、地神経を誦む盲僧団がいて、七座を作り、平家をも語ったと思われる平家座という一座もあったことが、岩橋小弥太や中山太郎などの研究にもある。⁵³

また当時の琵琶法師は、当道・盲僧共に、その本来の職掌のほか、哀曲・今様・小歌・物語をも語り、歌い、その職階の如何にかかわらず、宴に待して、祝儀を貰い、また時に廻困して、社寺を訪れ、諸芸を奉納したりしたことは、記録に明証がある。

中山や岩橋などが、この当道・盲僧の二派は、このころは未分化であったと説いたのも、当然であろう。

九州の高良神社には、寛一本の『平家物語』があり、岩橋によると、それは応安四年（一三七〇）の奥書があり、まぎれもない寛一の正本であるという。九州は当道にもゆかりの地であったのである。

当道側の伝承としての『当道要集』にも、例の祖神雨夜尊（人康親王）の所領が九州の大隅・薩摩・日向の三國にあり、そこにある年々の貢米を盲人に支給することになったと語っていることも、史実ではないが、注意すべき伝承で、日向は、かれらの勢力圏に入れるべき主張が、こめられているのである。

ところで、伊藤芳枝は、日向の生目八幡社をはじめ、九州、中国、近畿などに分布する生目社の小祠、それにまつわる景清の伝承地、そ

の塚や洞穴、また持仏や遺品等々が、盲僧の薬師信仰と結びついていたという推論を行ったが、これは正しかろう。これらはみな近世以降のものらしいが、それ以前の景清伝承地も、類推できないものでもない。

その事例を一つ挙げれば、山口市赤妻の生目八幡は、湯田温泉薬師と呼ばれ、景清をまつり、眼病治療の神で、拜殿の天井には琵琶の絵馬、両眼を描いた絵馬、琵琶とパチの模型などが掲げられているという。

伊藤はこれらを、盲僧らが薬師に願かけし、目の回復を祈ったのであり、生目信仰と薬師信仰は、これら盲僧らによって諸国に伝わったと論じている。確かに蓋然性は強い。

ただこの景清伝承と結びついていたのは、全国的に見ると、薬師ばかりでなく、観音、地藏なども数多くあって、みな盲人に結びついていることは、後でも述べるであらう。

中山太郎が、この景清塚の全国的分布は、もと「景清」の字を音読したケイセイが、遊君・傾成に通じることから、もとは遊女塚であったと論じているが、これはあまりにも、乱暴な推論である。遊女塚ならば、なぜ洞穴とか眼病治療と結びつくのか、解釈に困るであらう。

また景清伝承地は、多くの場合琵琶やまた刀剣・ヨロイ・カプトなどの遺品があるのも遊女塚とは思えない。

九州の地神盲僧は、一風変わった風を持っていた。これは盲僧であるのに、帯刀をしていたのである。ヨロイ・カプトなどは、後人が勝手に持ち込み、加えたものかも知れないが、刀剣などを盲人が伝えるのは、地神盲僧ならおかしくはないのである。

註

(1) 荒木博之「盲僧の伝承文芸」(『講座日本の民俗宗教』七昭54年弘文堂)。

(2) 秋葉隆「朝鮮巫俗の現地研究」(養徳社昭25年)。

(3) 岩橋前掲書。中山前掲書。

(4) 伊藤芳枝「周防長門の盲僧と薬師信仰」(中野編前掲書)。

(5) 伊藤前掲論文。

(6) 中山太郎「景清塚」(『郷土研究』二の八)。

五、日向の盲僧と景清

ところで、九州の盲僧の伝承にも、古くから目をえぐる話があることは注意すべきである。荒木博之、成田守などは、これについて詳しい研究をしている。これを略説しよう。

福岡市高宮の成就院に根拠を置く、女清法流の伝えた『仏説盲僧縁起』によると、昔、天竺のアシヨカ王の子にクナラ太子という王子がいたが、継母に憎まれて国を去るが、父王が重病に患り、命が危なくなったので、相人が卜すると、太子の両眼を抜き取って薬とすれば本復するといったので、太子はこれをきき、自ら両眼をえぐるってこれを贈り、王位を捨て、盲目の琵琶法師となって、諸国をまわったというのである。

このクナラ太子譚は、『今昔物語』巻四にも見え、ここでは、このアシヨカ王の太子クナラは、容姿端麗で、継母后に横恋慕され拒んだので、逆に王に譴責され、隣国に行く。后の奸計で、偽りの宣旨が出され、王子はこれを信じ、自ら目をえぐり、盲目の琴ひきになって、さまよい歩く。後、奇瑞によって本復する。

この話は、鎌倉時代初めには、かなり知られた話で、『康頼宝物集』や、『三国伝記』などにもある。

もともとインド説話で『阿育王経』にあり、中国の『法苑珠林』にも見える。説教・法話の題材にされたものらしい。

継母が継子に横恋慕し、拒絶されて、仕返しに、謀計をもって、ざんそし、継子は追放され、流離するという筋は、エジプト、ヘブライ、ギリシアなどにもあり、日本の謡曲の『弱法師』、説教師『しんとく丸』『愛護若』などにも見える、世界拡布型の説話であるが、殊に日本の場合では、『弱法師』『しんとく丸』のような、盲目の乞食となる点で、インドの説話と通じるものがある。

貴人が自ら目をえぐって盲目になり、流浪するという話は、遙か遠くのギリシア神話にもある。テーバイ伝説園といわれるテーバイの古王オエディプスを中心とした物語で、ソフォクレス三部作といわれる戯曲の中の『オエディプス王』及び『コロノスのオイディプス』の二曲に採り上げられ上演された。

前者の筋は、ある運命の定めによって、全く知らずに、己れの生みの父親を殺し、母親と婚して、王位についたオエディプス王が、デルフォイの神託により、己れの罪業を知り、自ら両眼をえぐって、盲目の乞食となり、王位を捨て、漂泊の旅に出るといふ筋であり、後者は、この王がコロノスの地で、生涯を終えるという物語である。

古代ギリシアには、ホメロス及びその子孫と伝えるホメリダイという盲目の伶人団がいて、叙事詩を語り歩いたことは、前述したところである。従って、ホメロス詩の中でも、デモドコスとか、フェミオスなどの盲目の伶人が、オデッセウスの招かれた王宮に出て、叙事詩を唄い、王や客人たちにきかせる場面がある。またホメロスに出て来る有名な盲目の伶人タミリスは、音楽の神ミュージズたちを超える唄の技を持つとうとして、罪せられ、その視力と歌の天分とを奪われたと伝えられるが、デモドコスについては、ミュージズは、その視力を奪ったが、その甘美な歌の天分を与えたという。

盲目の伶人が語ったからといって、必ずしも盲人のことばかり語るとは限らないが、傾向としては盲人は、とかく自分と同じ盲目の境

涯を持つ説話の主人公に対する共感を抱いていたことから、彼らの語りには、盲人が登場することが、心理的にきわめて自然であったのである。事実、盲目の唱導者が語った古説教や古浄瑠璃、祭文などにも、盲者の開眼話などが、実に多いのである。これは、よく言われるように、盲者自身が、自らその説話の主人公になりきって、一人称で語ったのだと考える必要もない。

柳田は、『米倉法師』などの、座頭を主人公とする笑話や、『蛇女房』の昔話、あるいは安寿と厨子王の母親の盲女の語り物なども、かつての盲者の語りと考えた。歌舞伎の『袖萩祭文』（『奥州安達原』）の袖萩や『生写朝顔日記』の朝顔などの話などに糸を引いている。

こうした面から考えて見ると、古代ギリシアの『オエディプス王』の盲目の話も、『オデッセイ』の中の、盲目の伶人デモドコスの登場の話も、盲人の管理したという可能性も確かにあると考えられよう。デモドコスの唄うトロイ戦争の場を、当の主人公のオデッセウスがきいて、感動して涙を流す話など、いかにも、真に迫る場面で、盲人の語りである感が強い。

アイルランドの伝説的伶人アシーン Ó Seáinín が金髪の神女ニアム姫に誘われて、常若の国テイルナン・オグに赴き、その仙宮に三年間姫とすごし、故郷アイルランドに還って来たが、故郷はいつのまにか三百年経っていて、知るものなく、姫の戒めを忘れて、馬を下り、途端に盲目の老翁と化したという、アイルランドの湖島の物語は、十八世紀の詩人ミカエル・コムンなどによって、紹介されているが、かれの場合も、盲目の伶人となって、各地を歩いたと伝えられる。かれが盲目となった理由は、これだけでは判らないが、これを伝えた盲人の印象が、この人物の最後の破局を、こうした形で彩ったのかも知れない。

こうした遠隔の地の伝承例を引くことは、必ずしも、これらの話が、

何らかの経路を経て、東アジア。日本に伝播されたなどという仮説を立てることを意味しない。

盲人の伶人の存在は、世界的であって、それは、必ずしも文化の伝播によるものではなく、盲目の故に、音感が特に発達し、また長い詞章をも専一に覚えられるという、自然の配剤なのである。他のいかなる職業よりも、これを唯一の生業として選び、また選ばれるのが、古い素朴な社会では当然であった。

そして、その盲人たちが、かれらの語る物語の中に、おのれのイメージを投影させた形で、盲人を登場させたり、その目をくじる話などが出て来るのは、自然の理である。一種の社会心理学的な現象だとも言える。

こんなことから見ると、前に挙げた中国古代の伝説的聖王である舜の父を瞽叟といい、盲人の楽人だったと語る話も、更に『史記』刺客列伝に見える、高漸離が目をつぶされ、筑を撃って、唄の名人となり、始皇に召される話も、何だか、それらの話全体が、盲人の伝承であったかどうかを疑わせるものがある。

ただインドのクナラ太子の伝承などは、直接彼ら盲人団の語る法話の重要な題材であったことは確かであるから、そうした話が、彼らの元祖とされる景清の一代記に、影響を与え、その主人公が自ら目をえぐって、盲目の伶人となる話ができるのは、当然である。

アメリカの著名なる英雄叙事詩の研究者である、A・B・ロードが、その著『物語りの唄い手 The Singer of Tales』の中で、論じているように、こうした口唱の叙事詩を語る語り部たちは、単に父祖より代々語り継がれていた長篇の叙事詩を、そのまま全部を機械的に暗誦して唄うのではなく、その筋の主要だけを記憶しており、その朗唱のときに、前々から覚えていた数々の故事成語、枕詞や繰り返しなどのきまり文句、人物の衣裳や陣ぞろえなどのきまった表現などを、その

口演の場に合わせて、即席に組み合わせて構成するのであり（これを、オーラル・コンポジションと呼ぶ）、これは、古代ギリシアのホメロス叙事詩、中世の騎士物語などの口唱も、そうした原則に基づくものだという論を立て、その傍証として、その師ミルマン・パリーが、自ら見聞・調査した、旧ユーゴのコーヒー・ハウスを巡回する流しの口承叙事詩の唄い手の口演を、何度も繰り返して追跡調査し、その原則を、実証したことは知られている。

この成果は、世界の叙事詩研究や口承文芸研究に対し、大衝動を与え、更にこれはノラ・チャドウィックや、ウィクトル・ツイルムンスキーらが、かつて旧ロシアのラドロフらによって調査された、ロシア叙事詩ブイリナや、ウラル・アルタイ、シベリア、モンゴルなどの諸族の伶人たちの英雄叙事詩の口唱の実態を、検証したところ、全くその通りであったことが、明らかにしたのである。

こうした成果は、日本の中世の語り物や昔話などの口承文芸に見られる多くの異伝の成立にも、新しい視角が、必要とされて来ている。

異伝の内容は、後世になればなるほど、多様性を加えて行くことは、当然であるが、それは記述性の濃いものよりも、口承性の濃いものほど、複雑多岐なものとなり、自由奔放な空想が、生まれ、また数多くの民間説話が挿入されて来、やがては、その主人公は史実性を失い、超自然性をもった神話的な人物となる。景清が、霊剣アザ丸をかざすと、雲霧が立ちこめて、その姿を隠したり、超人間的な怪力をもって、牢を破り、また河原での斬首と清水観音の身代りなど、正にここに画かれるかれは、一種の「神の子」として不死性をもった、神話的人物である。

馬琴などの、江戸時代以来の文献一辺倒の説では、こうした虚構の後日譚の構成を、ある特定の作者が、中国の故実、日本の記録などに典故を採って、それらを景清一人の一代記の形に纏めたのであろうな

どという推定を立て、近代の多くの学者も、これに従っているが、これは、こうした伝承説話の形成を、近代作家の創作と混同した結果の誤解である。

文盲者の多い吟詠俗人や、目の見えない盲目の楽人の語り、唄う物語は、書承による文書のそれよりは、遙かに独創性・空想性に富み、いささか耳にした説話をも自由奔放に取り込み、全く異なった人物の伝承や、神話的な非実在の人物の伝承なども自由に取り込んで、膨れ上がらせることは、A・B・ロードやヤン・ド・フリースなども、検証していることである。文字を知らぬ俗人であったからこそ自由に靈感を働かせ、自由に「オーラル・コンポジション」をなし得たのである。

近代の学者の間でも、旧来の文献主義を取っている人が多く、謡曲の『大仏供養』や、『景清』などが、先ず創作され、これらを材料として、舞の本の「かげきよ」ができ、またこれをもととして、浄瑠璃や歌舞伎の景清が創作されたというような論を立てる人が多いが、そうではなく、この関係は、逆の場合が多いのである。謡曲や舞の本の素材としてすでに、実在のかれとは異なる神話的人物の景清像が、盲人たちの語りの中に作られていて、そのヴァージョンの断片が謡曲の数曲に表われ、またはば全体像が、舞の本や古浄瑠璃に出て来たのであると考える方が、より蓋然性が強い。そうでなければ、「逃げ上手」とさえ書かれた、英雄らしからぬ影の薄い軍配物のかれが、突然、それほど年月も経たない間に超人間的な怪力や不可思議な幻術を持つ神話的な人物に変身する謡曲や舞曲などの景清が、登場することの説明にはならないのである。

それにしても、そうした巨大な神話的虚像としてのかれの後日譚が、平凡なかれ自身の実像とは余りにもかかはなれていることは、どうしても、説明がつかない。

やはり多くの学者が論じるように、日向を中心とした醸成して行った「盲景清」の伝承は、日向の盲人らが持っていた別人物の盲人英雄のそれであったに違いないのである。

吉田東伍は、端的直載に、「宮崎郡生目」の条に、「今按に、宮崎庄は往事字佐領にて、彼の北方瓜生野より生目村など迄、大略庄田たり。景清と云ふは、此庄田に關係ある人にて、其名字の悪七兵衛に同じきより、後付会の談を為すごとし」と述べていて、『日向見聞録』に見える、景清が北方百町、南方百町、池内百町を知行したという伝承を引き、この地の景清は、実際に庄田を支配していた同名異人だろうと断定している。

日高重孝は、近世の文書と思われる、「日向高千穂植野宮八幡、幾足寺控書」を引用し、この寺が日向・肥後・豊後国の盲僧の本山で、位階志望の盲僧は、例年六月十六日の八幡宮の涼の祭礼(盲人の祭り)に参加し、位階を授けられたといい、また下北方の奈古八幡の古文書に、「海の景清という宮司の名があることから、この景清を、景清に付会したのかという説を、紹介しているが、それらも信じることはできない。伝説の景清は宮司ではなく、一介の盲法師にすぎないのである。

註

(1) 荒木博之前掲論文。成田守「盲僧の伝承」(三弥井書店 昭60年)。また原伝承としてのインド説話は、岩本裕「仏教説話」(筑摩書房昭39年)参照。

(2) Borna, C.M., *Heroic Poetry*, 1961, pp. 420-421.

(3) Nilsson, M.P., *The Homer and Mycenaean*, New York, 1968, pp. 201-209において、デモドコムのような語り手の俗人は、ミューケナイ時代からあったと論じている。

- (4) Harland, E. S., *The Sciences of Fairy Tales*, New York, 1904, pp.196~198.
- (5) Lord, A. B., *The Singer of Tales*,
- (6) U. Oral Compositionの理論と方法について、Foley, J., *The Theory of Oral Composition*, 1984, Finnegan, Ruth, *Oral Poetry*, 1977, 4, 4, 解読されたこと。
- (7) Chadwick, Nora K. and Zhrumski, *Oral Epics of Central Asia*, Cambridge, 1962.
- (8) 吉田東伍『大日本地名辞書』中国・四国・西国。
- (9) 日高重考『日向今昔物語』(日向社昭26年)。

六、盲人と水神信仰

ここで、九州盲僧の元祖といわれる伝説的盲僧玄清法印の十哲といわれる法弟に、清教、清俊、安清、芳清など、「清」を名乗る盲僧の名が頻発するのは、注意すべきであろう。もしかすると、景清を名乗る法師も、かつていなかったとは断定できない。もちろん、法名だとすれば、ケイジヨウなどといった音読みで、カゲキヨとは読まなかったであろう。これは今の逸説に過ぎない。

それにしても、こうした当地の盲僧の一人が、源平合戦の勇士の一人と同一視される可能性は、十分である。この地の盲僧の帯刀の風が、この結び付きを、強めたのであろう。

九州の盲僧伝承には、その刀で蛇を退治したという縁起伝承が多い。江戸中期のものであるが、豊後国の盲僧寺である明王山護王院所蔵の盲僧史料「護生院文書」によると、昔、元明天皇のとき、大宮に色々な厄がおこったので、博士に卜せしめたところ、堅牢地神の荒びと判ったので、九州九か国の盲僧八人を呼び、地神経を説ませ、祓の秘法を

行わせた。このとき大蛇が出て来たので、盲僧たちは、剣と杖をもち、これを退治したという。

九州の盲僧らしき伝承として、『塩尻』十二の中に、肥前国佐賀の近くに川上という地があり、その盲人はみな脇差しをさしているが、里の伝えでは、鎮西八郎為朝が、この村の川に住む大蛇を、強弓・大矢をもって射たところ、蛇は川底に沈んだ。ある盲人が一刀を差して、水中に入り、これに縄をつけて引き揚げた。それ以来、この里の盲人が帯刀を許されたという。

このような盲人と水霊、刀剣との結び付きは、日向の盲景清伝説の源流についての示唆を与えるものである。

景清は、謡曲や舞曲では、靈剣アザ丸をかざすと、雲霧が湧きおこり、その中に姿を隠し、空中に逃げ去るのであるが、それはいかにも、水霊・雷神・蛇神としての本質を、よく表している。

刀剣は、その青白く光る刀身の形が、天降る雷電・竜蛇の形を連想せしめるので、しばしば雷神と結びついていたことは、かの神代の著名な雷神タケミカツチと靈剣フツノミタマの結び付きを見ても判ることである。

『日向見聞録』によると、かれの戒名は、水鑑景清居士というといひ、また大田蜀山人『一話一言』によると、この宮崎の碑石を削って飲むと、眼疾が治るといひ、石碑も過半削られたが、この辺りのウズラは尽く片目であるという。この水鑑という戒号は、水霊との関係をよく表している。

盲僧と水霊との関係は、妙音天女といわれる弁財天との関係からであるとする仏教側からの説明もあろうが、柳田も想像したように、それ以前の固有信仰から、盲人と水の神とは結び付いていたらしい。

『越後野志』巻九に見える伝記、昔一人の座頭が琵琶を弾じていると、美しい女が出て来て、われは大蛇であるが、汝の一曲に感じたの

で、汝だけに告げるが、近日中にこの谷一帯を淵にする故、これを人に告げるなどいい、告げると、命を取ると言われた。座頭は、村里に下り、命をかけて、村人に危険を訴えた。そこで大蛇は退治され、村は助かるが、その盲人もただちに死んだ。これを神にまつたのが、大倉権現で、大蛇も大利大明神と呼ばれ、今にその祠が頂上にあり、神体として、その折の琵琶があるという。この類話は、諸国に広がって居り、ときおりその盲人は三味線引きであったり、按摩であったりし、必ずしも琵琶ばかりではない。

こうした蛇体の水の神と盲人との結び付きは、もと盲人が笛などを奏して、水神に仕えた風から出たものと、柳田は推定するが、それにしても、なぜその水神に仕えるものが盲人でなければならぬのかは、疑問が残る。

むしろ、これは、私に言わせるなら、水の神自身が、元来盲目の神であったという原始信仰に由来するのではないかと考えている。

昔話の「蛇女房」は、やはり蛇体の女神の話であるが、自分が生んだ児の成育のために、目をくり抜いて、夫に托し、水界に帰って行くのである。

盲目の水神という観想は、諸外国にも往々見かける。湖や淵、海底などの神が往々にして盲目と考えられているのは、視界のきかない、暗い状態の表現なのであろう。

私は、『古事記』に見える、イザナキが十拳の剣を抜いて、火神カグツチを三段に斬ったとき、その血によって生まれたという闇闇の神や闇闇象の神などの「クラ」は、『古事記伝』では、「谷」をさす古語であるとされるが、私は、前述の大倉権現などから、「盲目」の味味があったのではないかと考えている。蓋は、蛇体の水神のことで、クラオカミは、「盲目の蛇神」を意味し、クラミツハは、同様の盲目の水の女神を意味するのではあるまいか。

このような水神盲目という観想は、田の神や圃の神が、盲目であると言う民間伝承と系統を一にするものであろう。

盲目の神に仕えるものが、盲人であるのは自然の理であるが、また盲人は自らの目の回復を祈って、音曲をもって神を慰め、またその神の水徳を身に体せんと、その泉水で、目を洗ったり、また眼の形をした牽養物、それを画いた絵馬などをささげ、また時として、その楽器を奉納し、またその目の回復を祈る持仏である観音や薬師などの堂を、かたわらに建てたのであろう。これが恐らく、生目信仰の源流であろう。

こうした盲目の水神の一つが、やがて九州の地神盲僧の管轄下に置かれ、またかれらが重要な拠点としていた宇佐八幡の信仰に包摂され、その着属神とされ、生目八幡と呼ばれ、その創設者として、元祖の盲人と伝えられていた景清（多分源平合戦の景清とは別人物）を、祭神としたのであろう。

それにしても、この日向での景清は、人丸という娘と、結び付いて語られている。『日向見聞録』によると、彼女は盲人の父景清を訪ねて、ここで再会し、これを介護したが、建永元年父に先立ち、二十七才で病没した。父親はその後、独り淋しく霧島山に出かけ、山中で没したので、この遺骸を里人が持ち帰り、葬ったのが、景清廟で、かたわらに娘人丸の墓も建てられたという。

この景清と人丸の結び付きは、古典では、謡曲「景清」で知られるが、そんな突飛な名の女性が、ここに登場する意味は判らない。

やはり、ここでも謡曲の話が先に有名になったから日向に人丸の墓もできたのではなく、逆に、この景清の塚とならんで、人丸の塚があったから、そこに由来話ができ、それが有名になって、謡曲にある再会の話ができたのであろう。人丸という名は、柳田の研究によると、関東などに広く、一つ目の神として知られる神の名であった。

前述の『一話一言』によると、この景清の碑の付近にすむウズラは、ことごとく片目であると伝えていっているという。

景清は片目ではなく、全盲なのであるから、このウズラが片目であるのはおかしい。然し、人丸の方は、もともと片目の神の名であるとすれば、この地にもともとあったのは、人丸塚の方であって、景清塚の方は、後からできたのではないかと考えられよう。

柳田は宇佐八幡の神は、もとタタラの神であり、一眼神の信仰を持っていたという説を説いているが、もしその伝承の一伝として、この地に隻眼の神の伝承があったとすれば、それと、盲僧らの元祖とされる景清のそれとが、後で結び付いたのかも知れない。その由来話が、父娘として再会する話であったのであろう。それが、後に謡曲によって採りあげられたのであろう。その逆ではない。

それにしても、生目の神と水神との関係は、見逃せない。前に挙げた大阪堂島の玉江橋の側の生目八幡は、その隣に水天宮や河童嶋があり、水神縁の一族と見なされている。

註

(1) 成就院系盲僧の伝書の一つに、開祖文清法印門下の十哲の中にこれらの名がある。中野輔能「盲僧教団と琵琶楽に関する伝承」(中野編『盲僧』
歴史民俗学論集2、名著出版平成5年)。

(2) 安部徹「豊後国盲僧史料・護生院文書」(中野編『盲僧』所収)。

(3) 柳田国男「米倉法師」(『桃太郎の誕生』、『定本』第八巻)。

(4) 柳田国男「一つ目小僧その他」(『定本』第十二巻)。

七、尾張・熱田の景清伝承とアザ丸

中山太郎の集録した景清の伝承地は、殆ど日本全国にまたがり、殊に、謡曲や舞曲に出て来る、尾張熱田、大和奈良坂、京の清水坂などの地には、その妾とされる遊君阿古王または阿古屋、またこの持仏とされる薬師や観音、地藏などや、霊剣との結び付きが語られているが、またこれがとかく盲人や、眼疾、水盞などと結び付くことが多い。これらが盲僧によつて、もたらされたものであることは、確かであろう。柳田は、阿古王・阿古屋の名の「アコ」は、神祭りの秘儀にあずかる巫女の通称であろうという。

阿古王は、舞曲では、夫を裏切り、訴人をするが、源頼朝に憎まれ、川に沈められる。この水死する結末は、彼女と水との関係を残している。近松の『出世景清』では、夫への裏切りとしての訴人をする糸りは同じであるが、その動機は、夫とその妻熱田大官司の女小野姫との仲を知って、女心からカッとなったことであり、その死も水死ではなく、景清の牢の前で、泣きわびて、二人の子とともに自殺するのであるから、ここでは愛情の女である。作者の文筆的創作であろう。

柳田は景清の超人的な牢破りや霧の呪法などの不死身性と、これを裏切る阿古王との関係を、中世奥州の座頭が語った『田村三代記』などの語り物に見える、田村將軍と不死身の悪鬼阿黒王、その妻の立烏帽子ないし鈴鹿御前の物語などと同じく、不死身の怪物を、英雄が退治するのに、先ずその怪物の寵姫をだまして裏切らせ、その急所をきき出して、これを殺すという世界に分布する説話型のものであると論じているが、恐らく柳田の脳裡には、『旧約聖書』士師記の古伝承「サムソンとデリラ」の話があったのであろう。サムソンが底知れぬ怪力を持つ不死身な勇士なので、敵方のペリシテ人は、一計を案じ、遊女デリラを、サムソンに近づかせ、その力の源泉であるかれの毛髪

の秘密を知り、かれが眠っている間に、毛髪を切り取らせ、無力になつたかれを捕らえるのである。捕えられたサムソンは、目をつぶされて盲目となつて石臼をひかせられるが、やがて髪が生えると共に、その神力も回復し、ペリシテ王の宮殿の柱を引き抜いて、敵を全滅させ、自分も死ぬのである。フレイザーは、この型の話は、世界に分布して居ることを論じたが、日本でもこの立烏帽子・阿黒王の伝承のほか、お伽草子『俣藤木物語』に見える、七星の化身として、生身のほかに生き写しの六つの影をもつ不死身の平将軍将門をたおすのに、竜神の化身としての小宰相の局、または時雨という名の女人を、媒介として、その生身をきき出し、これを射殺したという説話とも共通する筋である。

景清とこれを訴人する裏切りの女人阿古王・阿古屋との関係は、正にこれと同型の説話であろうが、柳田は、立烏帽子の名と同じく、阿古王・阿古屋も、一種の巫女・遊女の名であつて、これらの伝承を、かれらが管理し、わざおぎの共として論じたのであらうと推測したが、それはそれとして、遠い地のサムソンの伝承は、最後に主人公が盲目とされる件において、どこか超人的な怪力を持つ景清物語と似ている。然し、この類似は、偶然かも知れない。

謡曲では、この阿古王・阿古屋は出て来ないが、熱田の一遊女と契り、人丸を生んだことが語られ、どこか熱田と景清とのつながりを、感じさせるものがある。舞曲では、景清と熱田との関係は、熱田大宮司の女を景清が妻として居り、愛人の阿古王がこれを訴人することになつて居り、複雑であるが、それにしても、尾張・熱田と景清との関係は、極めて深いものがある。

この尾張・熱田には数々の伝承地があり、また景清の所持の靈剣アザ丸と結びついた伝承がする。

蜀山人『半日閑話』四〇九によれば、景清は、八鳥を逃れ、尾州熱

田に到り、大宮司のもとに隠れたが、今に景清屋敷と号する地があつて、竹藪十三間を残すといひ、またこの地にいたとき、眼病を患ひ、間島明眼院に通ひ、療養したので、快氣を得た。その礼として、鑑一領を明眼院に贈つたので、これが今でも存する。また景清の子孫が今でも知多郡に居るといふ。

尨がこのアザ丸は、これを持つと目に災いありといふ言伝えがあつて、これが景清の後、転々として人手にわたり、最後にこれを熱田明神に納めたといふ、奇妙な伝承がある。

近世の『卯花園漫録』や『落葉播』などの記すところでは、景清所持のアザ丸は、後世になつて千秋紀伊守（信長のころの熱田大宮司）の手に移り、そのため目がつぶれ、藤山掃部頭の手にわたつたが、これも流矢のため眼を失明した。後に丹羽長秀がこれを手に入れたが、眼病が久しかったので、熱田明神に奉納したといふ。

この尾張の明眼院とは、『尾張名所図会』によると、大治村馬島にあり、旧名蔵南院といひ、本尊薬師如来で、延文二年（一三五七）、清眼僧都が中興し、眼疾の奇法を伝えたといふ。これは江戸中期ごろから特に有名になつたらしく、江戸などにも馬島流眼科医を名乗る医者が多く出た。

この明眼院の起源が、どれほど史実を伝えているかは疑問であるが、この寺が薬師をまつて、眼病の治癒を祈願する寺で、盲僧らのかかわる療養院であつたことは推察できる。

このアザ丸が、千秋紀伊守など次々と人の手に移り、眼の災厄をおこしたので、最後に熱田明神に奉納したと言ふ伝えは、すでに『信長公記』の天文七年（一五四八）の条に記されているから、近世初頭には流布されていたことになるが、景清が明眼院に通つたなどは、当時におこつた風説で、取るに足らないとしても、これが最後に熱田明神に奉納され、現在まで、当社の重要宝物となつて居ることは、注目す

べきであらう。私は平成六年十月、当神宮の好意により、この神刀を拝観させて貰った。

神宮研究員の野村辰美によれば、鎌倉中期から末期に作刀されたものらしいという。また明眼院所蔵の景清の甲冑と唐櫃と伝える物は、何れも鎌倉から南北朝のころまでのものであるという。

それにしても、この神宮所蔵のアザ丸が果して、謡曲や舞曲の景清のそれと同じものであるかどうかは、不明であるが、多少意味や機能が違ふようである。古典のアザ丸は、雲霧をおこす呪物であり、明らかにこの熱田に伝わるという神代の靈劍、草薙劍もしくは天叢雲劍の信仰の受け継ぎであらう。『日本書紀』一巻の伝えでは、スサノヲが八岐大蛇を殺したとき、大蛇の尾から出て来た劍で、大蛇のいるところの上には、常に雲氣が漂っていたから、最初はアメノムラクモと名づけ、後に、ヤマトタケルの饒津の火難の故事により、クサナギと改名したという。竜蛇のもつ水徳の象徴としての靈劍で、後の馬琴の『南総里見八犬伝』に出て来る村雨丸などの靈劍伝承へと展開して行ったのであらう。

熱田明神は、もともとこうした靈劍を、奉斎していたからこそ、このクサナギ以外に、アザ丸とか、源氏の重宝クモキリ丸とか、熱田国信などの名だたる水徳を持つ宝劍が、後世になって奉納され、いよいよその神徳を高めて行つたのであらう。それにしても、アザ丸を受け継いだ人物の名に、千秋紀伊守の名があるのは、もと熱田大宮司の千秋家と関係を示す伝承として、特に注意すべきであらう。

このアザ丸を帯する者が、目の祟りがあるという伝えがあり、明眼院と結び付いているのは、この靈劍と盲僧との関係を、暗示する。

この熱田大宮司の姫の名は、近松の『出世景清』では小野姫という名になっている。これは、小野小町、小野お通などといった巫女的な伝承と結び付いた名である。一方の恋敵、の阿古王・阿古屋が、柳田

のいうような「巫女」を意味する語であることも関係し、妙な取り合わせである。もしかすると、この阿古王と小野姫とは、説話の原形では、もともと同一人物であったかも知れない。

尾張・熱田と景清との関係は、もつと色々史跡伝承地がある。景清社は、現在南区熱田神戸町にあって、もと景清の居宅のあったところとされ、明治五年村社とされたが、眼病に靈驗ありといい、またほか二か所の宅社と伝えるものが熱田付近にあり、また知多郡半月村（今、大府村大字吉田）には景清塚と景清社がある。またその村の常徳寺には景清の作の千手観音、また門前町浄久寺に、その持仏千手観音があるといい、また「水月景清大居士」という戒名のある位牌などがあるという。この戒名と、日向の「水鏡景清大居士」というのは、酷似した名である。どう見ても、日向系の盲僧らの伝承が入っている。

この地での景清社やその宅址は、まだ目をえぐらない頃の景清の伝承遺跡であったはずなのに、とかく盲人や眼疾と結び付き、また墓や位牌があり、子孫までもいるというのは、おかしいことであるが、これらもともと盲僧の信仰の拡布と結び付いていたとすれば、不思議ではなくなる。

このように、諸国に残る景清ゆかりの地は、とかく盲人と関係がある。『南都名所集』巻六によれば、奈良の勝願院の辻子には、景清の母の持仏の地藏があり、その地藏は盲目の姿であると伝え、またその地藏の錫杖は、景清の所持の杖だと伝えるが、これらも、盲僧と結び付いたのであらう。

景清劇は、近松の『出世景清』以後『壇浦兜軍記』や歌舞伎十八番の『牢破り』同『解脱』など、近世中期以後益々浄瑠璃や歌舞伎での人気番組となったが、それでも、どこか盲人や水神との関係を、そのストーリーの中で、ちらつかせている。

江戸末の河竹黙阿弥作の『岩戸の景清』では、景清は、小鳥丸の名

剣を持ち、江の島の弁天窟にこもり、源家調伏の祈願をこめるが、そのため頼朝は病み、天日は晦冥となる。ここで、秩父重忠や、和田義盛らの鎌倉武將の面々が、岩屋の前で、神楽を奏し、はやし立てるので、景清はやがて岩屋を出て、何処へか去るという筋である。いかに、神代の天の岩屋の故事や、『太平記』に見える「安曇磯良」の物語などを思い出させる「神話的な」芝居である。ここでは頼朝は、神話のアマテラスの変形であろう。

この江の島の弁天窟は、例の「裸弁天」で知られた聖所で、琵琶をかかえた（現在では琵琶は失われた）美女のヌードの弁財天女の像が、庶民の信仰を集めているが、ここは竹生島の弁財天と共に、当道や盲僧らの尊信するところであった。

弁財天の本体は、白蛇であるという信仰は日本の庶民の間では広い信仰であるが、この岩屋にこもる景清は、やはり水神に仕える司霊者の姿であり、その刀剣を持つての呪力により、天日が暗くなるのである。やはりこの芝居は一個人の創案というよりは、民間伝承の上に立っての筋書きだということが判るであろう。

景清伝承は、ほぼ全国に分布するが、これが往々にして、洞穴信仰と結びついていることは、注目すべきである。例えば、周防の光市室積丸山にある景清穴は、岩穴の内部は人工の普通の石垣で天井板があるが、村人は景清の住んだ穴とし、旧家原田氏の邸に祖先伝来の秘蔵として、景清の帯剣があり、名刀であるが、一度輪をはらえば、その人は発狂するという。また長門美祿郡美東町赤郷には景清洞があり、大庭景清が落武者と共にこの洞に住んだと伝えられ、かれは土地の娘と婚して、景清を生んだ。才智すぐれ十五才のとき長州一の剣士となり、追討の者を生け捕りにしたといひ、また盲になつて九州に下り、生を終えたという。生目八幡が景清洞の入口にまつられ雨乞い祈願で知られているという。

これらが、盲僧らの行場であったことは、察せられるが、洞穴とこれらの結び付きの機縁としては、やはりクラオカミのいますと信じられた鍾乳洞などの自然洞窟において、禿斎や雨乞いなどの行法をする盲僧らとの結び付きであろう。『本朝法華驗記』下巻には、盲僧経をきけば、病悩の者も病気が治り、悪霊邪鬼もみな道心をおこし、さらには早魘のさいは、この経により水が湧いたと記され、盲僧の呪術宗教家としての機能を説いている。

景清の霊剣が、雲霧をおこす呪物であるとともに、逆に持つものが眼病になったり、発狂したりする伝承は、盲僧の帯びている刀剣が、単に盲人の護身剣である以上に、これによって悪霊ばらいや、祈雨の行法などに用いられる呪具でもあって、みだりに他人がこれを持つと、災厄か目の祟りがあると信じられたのであろう。こうした民間信仰が母胎となつたのであろう。

註

- (1) Frazer, J.G., *Folklore in the Old Testament*, abridged edition, London, 1923, pp. 269~282.
- (2) 柳田国男『神を助けた話』所収「立烏帽子考」（『定本』第十二巻）。
- (3) 野村辰美「あざ丸と悪七兵衛景清」（『あつた』一三三号熱田神宮庁）。
- (4) 飯塚友一郎『歌舞伎狂言細見』。
- (5) 中山太郎『日本民俗学辞典』（梧桐書院昭和8年）。
- (6) 伊藤芳枝「周防長門の盲僧と薬師信仰」（中野樞能編『盲僧』所収）。

八、景清伝承の口承文芸性

以上の續々とした私の拙論を、まとめると、次のようになる。

一、景清の後日譚に関する謡曲や舞曲、歌舞伎、その他の民間文芸の源流・母胎は、民間の盲法師らの口唱的な語りにあるのであって、決して、特定の作者が創作したものではない。

二、これを最初に語り出したのは、日向を中心とした九州の盲僧団であって、かれらは、その元祖として景清なる人物を立て、源平合戦に生き残りの平家の落人の中の景清とを同一人物とし、その変身の理由として、当時民間に流布された数多くの刺客説話や各地の盲人の説話を自由に取り込んで、一大ヒーローと仕立てあげた。

三、これらの原型がほぼできあがったのは、室町中期ごろであり、これを母胎として、舞曲や謡曲、近世の古浄瑠璃などができ、またこれを演劇的に大成させたのが、近松の『出世景清』であり、またこれを受けて、文耕堂の『壇浦兜軍記』や歌舞伎の、『牢破り』以下ができたが、これらの作品にも、また民間伝承が色濃く表れている。

四、景清伝承の母胎としては、盲法師と水神の結び付きがあり、またそれと霊剣とのつながりも、みな盲僧らが、持ち運んだものである。

五、景清ゆかりの地とされる尾張・熱田その他の地の伝承も、日向系の盲僧らの運んだものであるが、また同時にこれらの地の盲人伝承を取り込んだものである。

ところで、これに関連して、最後に触れたい点がある。それは「英雄伝承の類型」という面から見た景清像はどうかということである。

近年、欧米の説話研究で、盛んに論じられている、世界の英雄説話の中に、その誕生、生い立ちから、死に至るまでの一代記に、一定のパターンがあり、共通な話根が、常に束になって組み合わされていることが注目され、その類型の抽出が試みられていることは、私が幾

つかの論文の中で、論述した。

紙数も限りがあるので、これを繰り返さないが、英雄は、貴族の家系に生まれながら、常に型破りの誕生をし、超人的な怪力や智恵を持ちながら、生国を追われ、数々の厄難・試練に逢い、時として死んで蘇生し、一種の不死身を得、悪竜や怪物と闘い、これを殺し、美姫の愛を得るが、これははかない縁となり、数多くの業績を残すが、常にその功は報いられず、各地を漂泊・流浪の生涯を終え、最後には不幸な死を遂げる、というような形を取るものである。ロード・ラグラン、ヤン・ド・フリース、ビル・バトラーなどは、それぞれの類型論を、世界の古代・中世の英雄伝承に当てはめて、その人物の英雄性を検証したことで知られている。

私も、かつて、これらの諸説を修正し、対象を東アジアにしぼり、日本の古代・中世の英雄伝承、ヤマトタケル、源義経などの伝説的英雄像に当てはめて、論じたことがある。

ここでは、景清伝承はどうであろう。少なくとも、かれの後日譚としての幻の虚像は、その実像とは似ても似つかない、不死身で、超人的な存在であるが、その筋骨きは、全く類型通りの英雄となっている。かれに与えられた頼朝暗殺の計画の失敗や、入牢、破獄、霊剣をもつての霧の呪法、数々の厄難、目をえぐっての日向下りや、その廻国・遍歴、不幸・落魄の生涯など、ほとんどその型にはまる。ビル・バトラーが説くように、英雄の不死身性が破れるのは、その愛人・妻・従者などがその秘密を敵にもらすことにあるというモチーフも、阿古王・阿古屋の裏切りの話に当てはまる。

六条川原での斬首と、清水観音の霊験による彼の復活は、文字通り英雄の「死と復活」である。その流離・廻国は、彼の生涯の特色であった。

ヤン・ド・フリースは、一般にこうした伶人の口承の語り物は、数

多くの類似の人物伝承を、その時代、場所はかまわずに自由に取り込み、同一の舞台に盛り込もうとする傾向があることを論じ、これを「伝承の遠近法」と名付けたが、これも景清には当てはまるであろう。

景清劇の中に、しばしば出て来る摂津の叔父大日坊殺害の話がある。

この話は、『本朝高僧伝』『和漢三才図絵』『摂陽郡談』『蕉斎筆記』など、近世の書に記される。摂津島下郡吹田村（大阪府吹田市）の北に、昔、三宝寺という寺があり、この寺の和尚は大日といひ、景清の叔父だったが、頼朝をねらって果たさず、ここにかくまわれたが、叔父がかれをもてなそうと、家人に言いつけ、「打手」を呼んで来いと言ったのが、打手とは「手打ちそば」のことであったのを、景清は誤解し、お上に訴人するのだと誤解して、これを斬り殺し、逃げ出したが、後で、誤解と判り、自ら目をえぐったといひ、その血刀を洗った池を、泪の池という。またこの寺の後にできた随光寺は、代々眼病を患うので、一名盲目寺という^{（1）}と伝える。誤解して人を殺すなど、景清らしくない軽率なふるまいだが、それにしても、この話の主人公は、別人であったに違いない。

文耕堂の『壇浦兜軍記』の第一段や、歌舞伎の『閨月仁景清』（『身替わり景清』）などでは、大日坊は、訴人する裏切者として出て来る。これらは、後世のものであるが、近松の『出世景清』には、片鱗だに出て来ない。摂津の口碑伝承から採られたものであろう。

このように、後世の浄瑠璃・歌舞伎といえども、先代の名作者の台本からの展開というよりも、盲僧らの語る口碑伝承の採用が、遙かに重要な劇の展開の契機となっているのである。

註

(1) Raglan, Lord, *The Hero*, London, 1949; De Vries, Jan, *Heroic Song and Heroic Legend*, translated by Timmer, B. J., London, 1963; Butler, Bill, *The Myth of the Hero*, 1979, etc.

(2) 松前健「英雄譚の世界的範型と日本文学」(『論究日本文学』立命館大学 56年、後に松前『古代信仰と神話文学』弘文堂昭和63年に再録)

(3) Butler, op. cit., p. 30.

(4) De Vries, op. cit., p. 197.

The Origin and the Formation of the Legendary Tales
on the Warrior *Kagekiyo* in Medieval Japan

Takeshi MATSUMAE